

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：82619

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23032

研究課題名（和文）鎌倉時代における文殊菩薩造像の伝播に関する調査研究

研究課題名（英文）Research of the spread of Monju statues from Nara to the rest of Japan in the Kamakura period

研究代表者

増田 政史（MASUDA, Masafumi）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員

研究者番号：50847134

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、鎌倉時代の文殊菩薩の彫刻作例の研究を通じて、尊像形式や図像表現の伝播の様相を明らかにした。とくに鎌倉時代後期に奈良・西大寺の集団において文殊信仰が隆盛していたことから、西大寺系の文殊菩薩造像に着目して研究を進めた。その結果、日本の南都（現在の奈良）において文殊菩薩像の尊像形式や図像表現が継承されていく過程のなかで、西大寺系の文殊信仰や造像活動が果たした役割の大きさを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仏教尊像の姿には一定の規則があり、尊像形式や図像表現の継承には文字資料や図画資料などの情報が用いられる。しかし実際にはそれだけではなく、継承されていく過程のなかで、時代ごとの傾向や地域・国ごとの傾向、人々の解釈などを受けて造像されるのである。本研究は、仏教尊像の造像活動という具体的事例を通じて、鎌倉時代の人々の宗教活動における時代や地域などの重要性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This research showed the spread of the form of group image and the iconography through the research of Manjusri statues in Kamakura period. In late Kamakura period, the faith in Manjusri rose by the cult of Saidaiji temple, Nara, for that reason, focused on the Manjusri statues made by the cult of Saidaiji temple. As a result, I showed the importance of the cult of Saidaiji, in the process of the development that the form of group image and the iconography of Manjusri.

研究分野：美術史

キーワード：鎌倉時代 文殊菩薩 南都 仏像 西大寺

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

鎌倉時代の南都(現在の奈良)における文殊菩薩の彫刻作例を対象とする従来の研究では、これまで主に二つの視点からの考察が主流であった。すなわち、中国の宋時代の図像の受容、奈良・西大寺系の文殊菩薩作例、である。しかし、鎌倉時代全体を通じた文殊菩薩造像を包括的に考察するためには、これらの繋がりについて研究し、さらに造像作例の展開を明らかにする必要がある。

本研究の成果によって、西大寺系の文殊菩薩造像の実態を明らかにし、ひいては鎌倉時代の南都における文殊菩薩の信仰と造像の様相を明らかにすることが出来る。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、鎌倉時代の文殊菩薩の彫刻作例を対象とし、その信仰背景や図像表現の伝播の様相を明らかにすることを目的とする。

(2) 中国に端を発する文殊菩薩を中心とした群像形式は日本にも受容されたが、日本の現存作例のほとんどは五尊形式である。平安時代後期は現在の東北地方に作例が確認できるが、鎌倉時代以降は奈良で流行したことが現存作例から知られる。現存作例の比較・研究を行なうことで、尊像形式や図像表現などの継承の有り様を明らかにすることができる。

(3) 奈良時代創建の西大寺は、鎌倉時代に叡尊によって中興され、その信仰の中心のひとつは文殊信仰であった。そのため、西大寺に関する彫刻や絵画などの作例が数多く知られている。それらを対象とした研究では、西大寺が所在する奈良近辺が主である。しかし鎌倉時代以降、西大寺が巨大な勢力を持ち得たのは全国規模で展開したためである。そこには必然的に尊像形式や図像表現などの伝播も想定される。

本研究では、西大寺が奈良に留まらず全国に勢力をもったという歴史的事実を鑑み、奈良の地以外に所在する作例も対象とする。また、歴史学の研究蓄積を援用することで、美術史学の従来の研究に新しい視点を加えることができる。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、鎌倉時代に造像された文殊菩薩の彫刻作例を対象とする。とくに、奈良の地域に所在する文殊菩薩像や末寺を含む西大寺系によって造像された文殊菩薩像を対象とすることで、鎌倉時代当時における時代性や地域性の特徴を確認することができる。さらに対象となる作例の尊像形式や図像表現を比較して共通点や相違点を抽出し、展開の位置づけを行なう。

(2) 作例に関連する文献資料を点検する。仏教経典やその注釈書から文殊菩薩像の姿の規則を整理し、鎌倉時代の国史、古記録、日記、社寺文書などを調べ、尊像形式や図像表現の形成・成立および継承・発展の背景を探ることとする。

4. 研究成果

(1) 本研究は、鎌倉時代の文殊菩薩の彫刻作例を対象とし、尊像形式や図像表現の伝播の様相を明らかにすることを目的とした。とくに鎌倉時代後期においては西大寺系の集団の存在は大きく、西大寺系の文殊信仰にもとづく造像作例に着目しつつ、研究を進めた。鎌倉時代の文殊菩薩像の展開の様相と、そこにおける西大寺系の造像活動の意義について研究した。

(2) 文殊菩薩を中尊として脇侍が付き従う群像形式は、中国に端を発し、その後、日本でも受容されていった。日本の彫刻作例のほとんどは五尊形式で、現存作例が南都に集中している。

日本の神と仏教の仏とを同一にみなす神仏習合と文殊五尊像が結び付いた作例を検討し、中国から受容した仏教の尊像形式が日本的な展開を遂げたことを指摘し得た。

また、鎌倉時代後期には西大寺系の文殊五尊像の造像作例が認められることを確認し、日本における文殊五尊像の展開に西大寺系の文殊信仰や造像活動が果たした役割の大きさを明らかにした。

中国で形成された文殊菩薩の群像形式は、日本では主に五尊形式という選択的な受容がなされ、神仏習合と仏教の尊像形式とが結び付くという日本的な展開や、西大寺系の造像活動による継承が行なわれていたことを確認した。すなわち、本研究では、文殊五尊像の尊像形式や図像表現の形成と展開についての研究を通じて、仏教彫刻の「かたち」の伝播と継承の具体的な様相を明らかにした。

(3) 西大寺系による文殊菩薩像の造像作例を対象とし、奈良周辺および各地の末寺所在の作例の比較をした。それにより、西大寺系のなかで重視された文殊菩薩の形姿や図像表現を見出し、それらの伝播・継承の様相を確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 増田政史	4. 巻 148
2. 論文標題 文殊五尊像の形成と展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 269-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------